

中世の花崗岩石切場を訪ねて

——滋賀県蒲生郡日野町蔵王勝手谷踏査記——

兼 康 保 明

1. 蔵王・かったい谷

中世石造美術を生産面から眺めた時、その素材である石材の採掘法や石切場について、これまでからあまりとりあげられることはなかった。その理由の一つには、中世の石切場が近世以降も操業を続けているため、古い採掘跡を残していないことにもよるのであろう。石材として中世石造美術を代表する花崗岩は、地名を冠した御影石の名が代名詞となるほど、神戸市内の産出地が全国的に有名である。しかし、中世に遡って、石切場の実態となると不明な点が多い。

「石造美術の宝庫」と例えられる近江は、花崗岩が全域にわたって産出し、各所に石切場があったようである。そのような中で、中世の石切場の問題を、石大工とその文化圏としてとらえようとしたのは、長年近江の石造美術を調査してこられた田岡香逸氏である。田岡氏は多年の調査成果から、近江の中に大和の技術をうけた石造美術の文化圏があることを抽出した。そして、その文化圏の中心を湖東の蒲生郡日野町蔵王に求め、良質の花崗岩を産出する石切場のあったことを問題提起された。^①

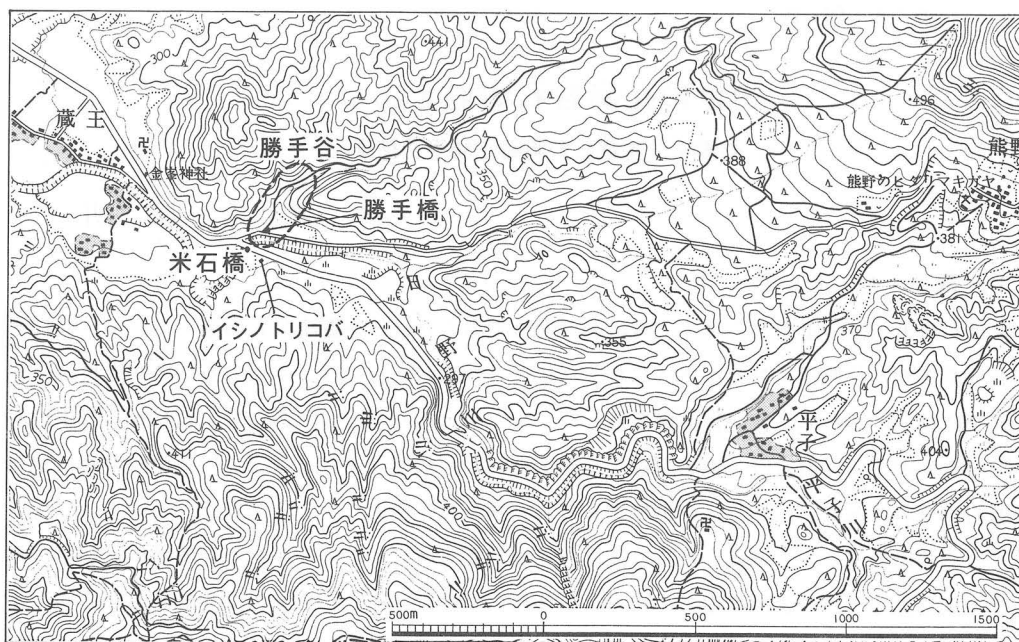
蔵王の石切場については、記録も伝承も残されていないが、田岡氏は同町鎌掛の瀬川喜久次翁の教示として、次のようにのべておられる。^②

「……蔵王の奥にかったい谷と呼んでいるところがあり、狭い谷筋が石のかけらで埋まり、足の踏み入れ場もないほどであるのを見て不思議に思っていたが、先生の話聞いて、はじめて古い石切場のあとであることが判ったといって喜んでくれた。わたしは早速一見したいと思い、令息の欣一氏に案内を頼んだところ、翁はこれを制止し、町内において他に石切場のあとらしいものがないことを、わたしが一番よく知っているし、到底、不自由な体の先生を近づけるようなところではないといわれたので、わたしは翁を信じ、このかったい谷が、中世の近江における石造美術の一大中心地であったことを認め、その製品の分布圏を蔵王の石造文化圏と名づけた。」

田岡氏によって蔵王のかったい谷が紹介されて以降、一部の研究者がこの谷に注目したのは、近世に採掘された様子がないことから、中世の石切場が比較的良好な状態で残されていないかという点にあった。ところが地理的に不便なことと、かったい谷の地名が残っていないことなどから、誰も瀬川喜久次翁の話にあるような谷を再発見することができなかった。

2. 踏査前記

私は『近江の石造美術』3を読んでかったい谷の名を知って以来、中世の生産遺跡としてぜひその実状を確認したいものと思ひ、いろいろと手をつくしたがどうしてもその所在をつきとめることができなかった。かったい谷の石切場に興味を覚えたのは、硬質な花崗岩の中世の採掘技術を



第1図 勝手谷位置図(破線内は米石の露頭範囲)

調査したかったからである。

ところが昭和60年の晩秋に、石造美術の仲間である甲賀郡水口町の池本良一氏より、かったい谷の所在がわかったと電話があった。池本氏によれば、これまでかったい谷の場所が不明確であったが、瀬川欣一氏の努力でようやくわかったのだという。そして、瀬川氏の案内で、水口町立歴史民俗資料館の米田実氏と共に出かけたが、谷では蔵王の石造文化圏の石造美術にみられる硬質で粒の細かい花崗岩はみつけることができたものの、石の屑（碎石）や石切場の跡のようなものはまったく確認できなかったという。また、この谷が日野川上流に建設中の蔵王ダムの水没地域内に入っているので、工事によって景観が大きく変わるまでに早く現地を踏査するよう勧められた。それからしばらくたって、米田氏からも同じ内容の電話があり、谷の状況についてさらに詳細な説明をうけたが、やはり碎石や石切場の跡は発見できなかったという。二人の連絡をうけて、早速にでも蔵王へ行きたかったが、時期的に冬をむかえることから、春になって雪解けを待って現地へ行く予定をしていたが、公私多忙で3月になってもなかなか身動きがとれなかった。そして、ようやく念願の調査にとりかかれたのは、4月になってからのことであった。現地を踏査しては、瀬川欣一氏や米田実、池本良一氏らと意見を交換し、何回となく谷を訪れた。本踏査記は、そうした成果を私なりにまとめたものである。

3. かったい谷の状況

現況 日野川上流の蔵王にある金峯神社より、その前を通る県道近江八幡土山線を約500m程東へ行くと、日野川に架る米石橋に至る。踏査時すでに、この付近より兩岸の山腹は、蔵王ダムの工事によって各所が削られ山肌が露出していた。米石橋付近は、ダム工事より以前に日野川

や県道などの改修によって手が入っており、かなり旧状が変化した場所もあるようだ。そのような中であって、土盛りされた県道で分断されているが、日野川左岸の川沿いに平坦地があり、イシノトリコバ（石の取り小場）とよばれていることは注意すべきであろう。

さて道路は、米石橋より日野川に沿って平子に至る県道と、米石橋の西詰めより熊野に向う道とに分岐している。分岐点より熊野に向う道を約90m程行くと、日野川の支流勝手谷川に架る勝手谷橋に至る。この橋より、北東に深くのびる谷が勝手谷である。勝手谷は、かったい谷がなまって変化したか、かったい（ライ病患者の別名）の語を避けて美称化したものと思われるが、現在もかったい谷とよんでいる人もある。

勝手谷の地形をみると、谷は左岸の丘陵の斜面がせまり傾斜もきつい。そのためか谷へは、勝手谷橋の西側より傾斜の緩い右岸に沿って、ちょうど車1台が通れるほどの林道がついている。この林道のため、谷の地形はかなり改変されているようであった。林道から丘陵斜面の裾や、林道の路肩から谷底までの斜面に、崖崩れを防ぐため各所に石垣が築かれている。また、林道を作る際に、多少丘陵の斜面を削ったり、あるいは谷の一部を埋めたりもしているようである。そのようなことから、谷川をかなり綿密に踏査したものの、水流に洗われて表面が丸くなった花崗岩の岩盤が露頭している以外何も無く、「狭い谷筋が石のかけらで埋まり」といった状態ではなかった。

^{こめ いし}
米石 蔵王の石造美術にみられる花崗岩は、細粒黒雲母花崗岩とよばれ、勝手谷川下流の谷筋に露頭が認められるが、日野の他所では産しないようである。細粒黒雲母花崗岩は、石の肌が細やかで硬質なため、石造美術としては風化しにくく長もちするだけでなく、石に独特の味が出ている。色調は、石の新しい割れ口で観察すると青味をおびているが、岩盤のところどころに鉄分が混っているため、赤く金気の浮き出したものもある。地元では、この細粒黒雲母花崗岩を米石とよんでいる。米石の名称は、細かい目の石が縮ったものではないだろうか。日野川に架る米石橋の名は、この石材にちなんだ名称であろう。

細粒黒雲母花崗岩は、日野川では米石橋付近からやや下流の右岸に限って認められるが、勝手谷に入ると両岸に露頭している。しかし、勝手谷の左岸は谷筋だけに限られ、千本野とよばれる左岸の丘陵では硬砂岩の岩盤がみられ、岩石の種類が異なっている。勝手谷の花崗岩の露頭も、勝手谷橋から約300m程上流までは認められるが、しだいに他の種類の岩石が混り、やがて頁岩の岩盤となる。

第1回目の踏査に入った時、勝手谷橋より10m程上流に、蔵王ダムの送水路工事がなされており、右岸の山腹から林道を断ち切って谷底以下まで掘下げられていた。その断面を観察すると、林道の高さから谷底までは花崗岩の岩盤であるが、林道より上の山の斜面には岩盤は露出していなかった。しかし、山土の中に、花崗岩をはじめ頁岩、ホルンフェルス、チャートなど大小各種の石塊や礫が認められる。この中には、ひと抱え以上もある細粒黒雲母花崗岩の玉石のあるのが注意をひいた。勝手谷橋と米石橋の間の右岸山腹でも、ダム工事のためブルドーザーが道を作っていたが、やはり赤土の中からいくつも花崗岩の大きな玉石が転り出していた。日野川をはさんで対岸にある、イシノトリコバ背後の山腹も削られて山肌の赤土が露頭していたが、勝手谷の山腹

にあるような花崗岩の玉石は含まれていなかった。

勝手谷のダムの送水路より少し上流で、林道沿いの山腹の崩れから転落した花崗岩の玉石を観察すると、角がとれて丸味をおびた直方体といった感じの石塊が多い。また、石の表面——皮膚はたいそうなめらかで、地質時代にかなりローリングをうけている。石塊が直方体に近いのは、岩盤の崩れ方からみて、石の節理によるものである。節理の状況にもよるが、こうした石の割れ方は、石造美術の原材として運び出すのには、比較的形が整えやすかったのではないだろうか。例えば、林道沿いに築かれた石垣は、谷から出る花崗岩を用いているが、石の節理を利用して整形が施され、四角く割った石の面を多用している。

砕石 石材を加工する際に出る砕石の確認が、かったい谷踏査の重要な目的の一つであった。確かに先行して谷を訪れた池本氏や米田氏のいうように、谷川に砕石はみられなかった。しかし、よく観察するとまったく砕石がないわけではなく、林道と谷川の間にある小平坦地の堆積土中から採集することができた。この堆積土中には、約10数cmの厚さで砕石が層をなして混っていたが、その量はあまり多くなく、目立つ程のものではなかった。

平坦地の堆積土の断面より採集した石片は、長さ15cm程のものから5cm程度のもので大小あるが、比較的扁平で必ず一方に明瞭な剝離面を残していることから砕石（フレイク）と考えた。また、砕石の表面をよく観察すると、風化の著しい原石の皮膚が残っている。このことからみて、扁平な砕石は、玉石なり表面の風化した岩盤の崩れを打ち割った際の剝片である。石材の節理の性格から考えて、人為的とも自然破砕とも判別しがたいものであるが、近江八幡市沖島の西岸を埋める石切場跡の砕石に類似している。沖島の砕石は、江戸時代以降盛んに掘り出した石英斑岩で、舟積み前に丁場より切り出した石材を、石垣用に整形する際にできたものである^③。かったい谷においても、谷で石材をある程度整えて細工所へ送り出すのであれば、中世でも同様な砕石が出ると思われる。

ところがこの砕石には、二つの問題点がある。その一つは、砕石がはたして中世のものかどうかである。そのため堆積土中に遺物が含まれていないか探したが、遺物は何も発見できなかった。従って、土の堆積した時期や、砕石の年代を決めることは極めて難しい。

次に問題となるのは、林道工事との関係である。例えば砕石は、林道工事の際に築いた石垣のものではないかということである。石垣は谷の石を用いていることからみて、現地で整形されたであろうことは疑うまでもない。また、平坦地のすぐ下流には、谷川から林道まで石垣で補強されている。このように考えると、平坦地の堆積土にしても、林道建設時の埋め立ての可能性もある。砕石の年代を決められない現状においては、実状のみを報告するにとどめたい。

ただ、ここでとりあげた砕石は、谷の入り口や谷筋全体に認められるものではなく、また、瀬川翁のような多量とよべるものでもない。よく注意すれば発見できるといった程度のものである。

4. 中世の花崗岩採石法

勝手谷林道により谷の景観が大きく変り、今また蔵王ダムの工事で地形が改変されてはいるが、

細粒黒雲母花崗岩の露頭範囲が、勝手谷＝かったい谷の限られた場所にしかないことからみて、この谷が中世蔵王の石造美術に用いられた花崗岩の石切場であった可能性は強い。また、かったい谷の入口に、谷の石材を示す米石（米石橋）の地名があり、さらにその周囲に採石の作業場を指すであろうイシノトリコバ（石の取り小場）の呼び名が残っていることは、多量の碎石こそ発見できなかったとはいえ、この谷を石切場と考えるうえで有力な傍証となろう。そうなれば、地形が改変される前の谷の旧状を語った瀬川喜久次翁の話は、今となれば貴重な証言となってしまった。

かったい谷の下流を石切場に比定した場合、注意すべき点は、谷の踏査でも瀬川翁の話の中にも、岩盤より石を切り出した跡がまったく認められなかったことである。もし、鎌倉時代から中世の全期間にわたって石材を切り出していたとするなら、かなり大きな採掘跡が残るか、各所に小規模な採石跡が残るはずで、谷の片側だけの林道工事で完全に埋没するとはとても考えられない。また、同じ花崗岩の石切場でも、石造美術の供給圏の重なる、日野町小野^{この}の石子山や近江八幡市岩倉山などには、矢穴の跡が残った岩があるが、かったい谷や周囲の丘陵では発見されていない。石造美術からみると、蔵王の石材は中世を主に盛んに使用されていたが、小野や岩倉では近世になってからも石材が切り出されている。同じ日野町内の小野は、江戸時代の地誌『近江輿地志略』に「〔石子山〕古野村にあり、土民石を切取って業とす」とあり、江戸時代から明治時代にかけて、続けて採石がなされていた。近江八幡市の岩倉も、中世より良質の石材を出すことから、蔵王と同様に岩倉の石造文化圏を形成していた。近世に入ると、城郭構築に大きな役割をたし、それ以降も採石が続けられている。近世まで石材が切り出されている小野や岩倉と、ほぼ中世のみで操業の終るかったい谷をくらべると、矢穴を用いる採石技術に時代差があったと推察すべきであろう。おそらく、中世の花崗岩の採掘法は、近世以降の花崗岩の石切場とは、かなり異なった方法がとられていたと考えざるをえない。

かったい谷での中世の採石法は、石の節理から方形に整えやすい性質を考慮しても、まだとても谷の下部に露頭する花崗岩の岩盤から、石材を切り出すには硬質すぎるように思える。近世になって、石切場として利用されずしだいに忘れ去られて行くのは、地理的な問題からくる運搬の不便さだけでなく、採石技術の難しさにも一因があるのではなかろうか。そこで考えられる方法が、山腹の土中に含まれる玉石や、岩盤の崩れた転石の使用である。土中より石塊を掘り出して石造美術に加工する例は近代にもあり、湖西の志賀郡志賀町近江舞子の石屋で次のような話を聞いた。

近江舞子の花崗岩は小松石とよばれ、石燈籠などの製作がなされている。そのうち地元にある巨大な石燈籠は、比良山麓の土中に埋っている花崗岩の石塊を掘り出して作ったというが、各部を同質の石で統一できず、部分的にやや異なった感じの石も混っている。土中より石塊を掘り出し石材とするのは、岩盤から切り出すより労力が少なくすむという。一方、同じ湖西の他の石屋によると、比良の石は石切場から切り出した石にくらべ、土中から掘り出した石の方が風化に弱いともいう。

こうした例から考えても、石材は岩盤から切り出さなくとも十分に獲得できるわけで、中世の

かったい谷にあっては、比較的容易に採掘のできる山土中の玉石や転石を素材に求めたとみるのが妥当ではなかろうか。また、谷に碎石のあったことはいかえりなく、石造美術の未製品がないことは、かったい谷はあくまで素材の採掘のみに限られた石切場であったからに他ならない。おそらくここでは、細工所へ運ぶ前の石材の粗割りがなされていたのであろう。谷の入口に近い日野川左岸にあるイシノトリコバの地名こそ、谷から石を出すためのそうした作業場跡をよく伝承している。そして採掘の範囲も、谷の奥にまでおよんだのではなく、谷の入口付近を中心になされていたのではないだろうか。

5. 石造美術よりみた原石の復原

現在のかったい谷を踏査した観察と、瀬川翁の話を状況証拠として、中世の採石のありさまを推定してみた。今度は逆に、資料の豊富な完成された石造美術から、製品に残された加工痕より原石の旧状を復原してみよう。その場合、五輪塔や宝篋印塔など石塔類の場合は、底面など見えない部分も含めてほぼ全体に何らかの加工が施されるため、成形前の石材の表面をあまり良く残していないので、資料として適当ではない。ところが、石仏や石塔を陽刻した小形板碑は、背面を粗仕上げのまま放置しているので、成形前の石材の皮肌——原石肌を観察するのに恰好である。

小形板碑の背面に、原石の風化した原石肌が残されていることに気付いたのは、彦根市妙楽寺遺跡より出土した、室町時代後期の小形板碑を実見してからである。この小形板碑が好資料であったのは、石材として遺構に転用されていたため、近世、近代と約400年程の間地下に埋没し、石の表面があまり風化していなかったことである。そのため、小形板碑の背面や側面などに残る原石肌より、ひと目見て湖東流紋岩の玉石（おそらく河原石と思われる）を素材にしていることが判る点である。この観察をもとに花崗岩製の小形板碑を比較検討してみると、同じ花崗岩でも石の肌が粗く、風化や凍てによって表面がボロボロになるようなものでは、原石肌の確認は難しい。しかし、米石のように石の肌が細かく硬質の石材では、風化などに妨げられることなく、成形前の石の面を識別することができる。

かったい谷に近い場所にある細粒黒雲母花崗岩製の小形板碑を例にとると、蔵王の金峯神社正面の脇に寄せ集められている、室町時代後期の小形板碑中に容易に見出せる。この小形板碑の背面には、必ずといってよいほど中央部に成形前の原石肌が残っている。原石肌は丸味をもち滑かで、露頭した岩盤の風化面ではなく、山土の中にあるローリングをうけた玉石のものである。小形板碑より古い小石仏についても、やはり背面に玉石の原石肌を残している。こうした観察からも、先にかったい谷踏査から導き出した中世の採石法を検証することは可能であろう。

6. 小 結

勝手谷を踏査した結果、県道、林道、日野川の改修などによって谷の旧状は大きく変わっているが、細粒黒雲母花崗岩が勝手谷川下流と米石橋付近の日野川右岸に限定されることから、この地が蔵王の石造文化圏で用いられた石材の産出地と考えて誤りあるまい。しかも、岩盤に採掘した跡を残していないことからみて、土中の玉石や転石を利用していたものと思われる。おそらく、

谷の入口付近でそうした石を採集し、米石橋付近のイシノトリコバで粗割りを行ったのであろう。イシノトリコバは、その名のとおり石材を加工する作業場であり、その作業は谷から出した自然石を運搬しやすい大きさに割るまでの工程であったのだろう。石材の大きさは、石造美術の部材の大きさから推定して、吊ったり背負ったりする程度の大きさではなかったであろうか。こうして、イシノトリコバで割られた石材は、蔵王にあったと推定される細工所に運ばれ、石大工の手によって石造美術に完成されたのであろう。

中世におけるかったい谷からの石材供給量が、いったいどの程度のものであったかは今後の課題である。しかし、石材の利用は、室町時代後期の小形板碑などの製作をピークに、急激に減少する。採集できる玉石や転石の量が減ってきたのか、それとも多量に生産される近世の墓石や建築材に不向きだったのか、あるいは中世から近世への社会的な変化によるものか、何らかの大きな変化があらわれたのであろう。それゆえ近世になって、石切場として利用されることもなく、しだいに忘れられていったと思われる。近在の造園業者に言わせると、石材は入手し難いが、硬質で石の肌が細かい米石で石燈籠を作ると良いものができる口をそろえて言う。この言葉こそ、量産向きではなく、工芸品に向いている石材の性格を、ズバリ言い当てている。米石こそ、鎌倉時代や南北朝時代に石大工が持てる技倆をぞんぶんにふるって製作した、宝塔や宝篋印塔など大形の石塔類にこそふさわしい素材だったのである。

(1986年6月吉日脱稿)

<註>

- ① 田岡香逸『近江の石造美術』3 (民俗文化研究会 1976 大津) P 142。
- ② 田岡香逸「近江蔵王の石造文化圏 付石大工平景吉の系譜とその作品」1～5 (『民俗文化』195～199 滋賀民俗学会 1979～1980 大津) P 1917。
- ③ 宮畑巳年生「石材業」(『びわ湖の專業漁撈』琵琶湖総合開発地域民俗文化財特別調査報告書Ⅱ 滋賀県教育委員会 1980 大津) P 442～448。
- ④ 伊庭 功『宇曾川災害復旧助成事業に伴う妙楽寺遺跡』Ⅱ (滋賀県教育委員会・滋賀県文化財保護協会 1986 大津)

妙楽寺遺跡出土の小形板碑については、「小形板碑の製作工程」(仮題)として別に詳述する予定である。

(追記)

本稿提出後、蒲生郡蒲生町下麻生に所在する赤人寺石造七重塔(文保2年銘)の解体修理に立会った際、笠の底面に原石肌が残っている例のあることを知った。石材は、岩倉産の花崗斑岩であったが、素材および採石法については、本稿での仮説を裏付ける貴重な資料である。

兼康保明「赤人寺石造七重塔の新知見」(『滋賀考古学論叢』3 滋賀考古学論叢刊行会 1986 大津)